

## 中村賢一郎教授・追想

清水 哲之

わたくしが中村君にはじめて会ったのは、今から30年以上も前の昭和29年の春、故関末代策先生のゼミナールの席上であった。ゼミ員は15名ほどいたが、中村君は、ゼミの中では変り種の工業高校出身であり、年齢も二つほど年上であったこともあり、自然にゼミの中で目立つ存在の一人になった。彼の風貌は、一見して、「がり勉の秀才タイプ」といった感じを与えたが、雪国の越後の出にしてみえずらしく、だれにでも気楽に話しかける人懐こい性質のうえに、気軽にいろんな仕事を引受け、ゼミが始まるや早速ゼミ旅行の準備のリーダーになるといった具合で、すぐにゼミの中心人物の一人になった。その彼の初めての企画である「雨に煙る城ヶ島の旅」は、彼が岩肌で足をすべらせて浅瀬にはまり、「利久鼠」ならぬずぶ濡れのドブ鼠になった姿が昨日のように目に浮び、忘れられない思い出の一つとなっている。

中村君は、学部から大学院を通じて一貫して関ゼミに籍をおいた最初の大学院生であり、文字どおり関先生の直系の弟子であった。関先生の期待も大きく、大学院修士課程を終了するや直ちに学部の助手になった。当時、わたくし達は、彼が関先生の後継者として、先生の助手になったことを羨望の気持で眺めたものであった。

学部ゼミ以来彼との永別の日まで共に歩んできた長い年月をかえりみると、おのおのの性格も、ものの考え方も少しづつ違っていたが、それはわれわれの友情を少しも傷つけるものではなかった。彼とはよく学校近くの喫茶店に入り四方山話に花を咲かせたが、話が興じてくるといつも、自分の考えや疑問を早口に言いながら、図やら記号を使って請求書の余白が真っ黒になるまでなぐり書きする癖があった。彼の説明は快刀乱麻を断って平易明快そのものであったが、あるとき請求金額の数字を消してしまい、そのうえ議論伯仲で長時間ねばったのが祟り、帰り際にレジで判読できない二杯のコーヒー代金に嫌

疑をかけられたことがあった。

中村君はどちらかというと下戸であった。その彼と御茶の水の駅近くで酒を飲み、酔がまわるにつれて大学論になり、「われわれは千代田区駿河台という陸の孤島に生き永らえてきた原住民のようなものであり、今ここでは文明人の手によって開発が進められ、生態系が破壊されてしまって部族の生存そのものが問題になっているのに、われわれお人好しの原住民は今だに槍と毒矢と楯だけで生きてゆこうとしているようなものだ」と、彼は力説していた。そこには、彼一流の比喩の面白さがあると同時に、彼の母校への愛情がこもっているような気がした。

中村君は郷里において幼にして「一休さん」の渾名をほしいままにしていたと聞いている。たしかに、彼の臨機応変に口をついて出る頓智は逸品であり、雰囲気なごませ、場を明るくしてくれたが、同時に事柄の真髄をするどくついた辛辣な批判を内に秘めたものであった。彼は、そういう出来の資質に恵まれ透徹した論理力と批判力とによって、次々に多くの学問的業績を生み出した。人が一生を投じて果たす仕事を早々にして仕遂げたといってよいであろう。彼はやはりあまりにもすみやかに人生をフルスピードで走り抜けたと思う。彼はフル操業で何時も休むことなく走っていたが、まさかフルスピードで天国までつっぱしるとは私は夢にも思わなかった。今も天国で走っているかもしれないが、にこやかに走っていることと私は思う。

友よ、ふたたびどこかで会えることがあれば、清き酒を酌みかわそう。

さようなら。